

デュルケム社会学はいかなる社会像を 描出しようとしたのか

— 『社会学的方法の規準』を読み直す— (下)

景井 充ⁱ

デュルケムによる実証主義社会学樹立の事業は、純粋な学術的欲求や要請から為されたものではなく、19世紀当時後半のフランスに現出していた不安定な社会的・歴史的状况に向けた、社会思想家としての応答である。したがってデュルケムの社会学説は、デュルケムの社会思想家としての思惟から生まれた作品である。本稿は、そうした観点から『社会学的方法の規準』を読み直すものである。そして、実証主義社会学の固有の認識方法を提示することと並行し、社会学的认识対象として措定された「社会的事実」というカテゴリーは、客観的な社会的・歴史的现实の忠実な模写でも選択的な構成物でもなく、むしろ存在すべき事実として描き出されたデュルケム独特の社会像であることを明らかにする。併せて、このユニークな社会像の特徴が、「集団」「集合生活」による「制度」の産出という発生論を中軸に描き出され、したがって立体的な構造を持つものである点にあることを示す。最後に、社会思想としてのデュルケム社会学を豊饒化するためには、「社会的事実」の発生論的把握に使われている化学的アナロジーを脱し、固有に社会学的な認識と表現を獲得して、この立体的社会像をより洗練することが必要であることを述べる。

キーワード：集合的存在様式、集合生活の一般的諸条件、結合、内的社会環境、モンテスキュー、動的密度、共変法、集合意識

目次

(以下、前号)

はじめに

1. 「社会形態学上の事実」とその意義

- (1) 「集合的存在様式」の二重構造
- (2) 「社会形態学上の事実」と〔正常-病理〕の区分
- (3) 「社会形態学上の事実」と社会類型の構成

(以下、今号)

はじめに

2. 「社会的事実」の発生論的立体的構造

- (1) 発生論的因果関係論
- (2) 「結合」の社会学的本態

(3) 共時的因果関係論

(4) 「集合的存在の諸条件」と因果的説明

(5) 社会的事実と社会学の再定義

3. デュルケム社会学の脱自然科学化を目指して

- (1) デュルケム社会学における「社会」
- (2) 「精神(道德)的凝集」の社会学の把握へ向けて

はじめに

本稿(上)では、ようやく『方法規準』第IV章に至って、〔行為様式としての集合的存在様式〕〔③〕の「行為様式」〔①+②〕に対する構造的規定関係が予示されるところにまで来た。〔行為様式としての

i 立命館大学産業社会学部准教授

集合的存在様式]は、第I章では「行為様式」と質的差異のないものであるという点でひと括りにされ、第II章「社会的事実の観察に関する諸規準」でも「社会構造的諸事実」[1895:45/116]にまとめられて、法的・道徳的規定などと並置されるにとどまる。ところが、第III章では社会現象の正常と病理を判別する際の、続く第IV章では社会類型を構成する際の、両者に共通する究極的根拠とされ、踏み込んだ位置づけがなされていた。そしてその考察の過程で、[行為様式としての集合的存在様式]に対して「行為様式」が発生的な依存関係を持つものであることが、ようやく言及されたのだった。本稿(下)で取り組む第V章「社会的事実の説明に関する諸規準」以降では、[行為様式としての集合的存在様式]の社会的に実質的な内容と、それがどのように「行為様式」を発生的に規定するののかに関して、論述が展開されていく。すなわち、[行為様式としての集合的存在様式]の中核には「精神(道徳)的凝集」という現象があるとされ、なお自然科学(化学)の把握ではあるが、その動態には「動的密度」という表現が与えられる。また、発生的な規定関係については、共時性を特徴とする相関的な規定関係であることが示され、それを捉える社会学的方法として「共変法」が採用される。以上から浮かび上がってくるものこそ、「精神(道徳)的凝集」を中心として発生論的な立体的社会像を描出しようというデュルケムの構想である。では、前編と同様、論述を丹念に追って再構成を試みたい。

2. 「社会的事実」の発生論的立体構造

(1) 発生論的因果関係論

[行為様式としての集合的存在様式]の内容と意義は、発生論的因果関係論とも表現すべき理論構成を開拓する第V章において詳論されていく。

デュルケムはまず、社会的事実が「個人」に対して外在性と拘束性という特質を示し、また権威を帯びて現われる¹⁾という点を捉え、「社会的事実」流

出論”を一蹴する²⁾。その上で、およそ自然現象一般に妥当すると考える発生論上の一般原理を、自らの実証主義社会学へ導入する。社会的諸事実をも自然現象＝「事物」とみなす実証主義の立場から、社会的事実の発生にも当然それは妥当すると考えるからである。自然現象一般に妥当する発生論的一般原理とは、「結合 association」[1895:102/207]こそが「諸物の一般的な進化の過程で相次いで生じてきた一切の新しい事実の源泉」[1895:102/207]であり、この現象こそが、諸部分の単なる「総和 somme」とは異なるものとしての「全体 tout」を生み出すという、いわゆる創発論である。デュルケムは、物理学・化学・生物学・心理学など、すでに確立されている他の実証諸科学においてこの考え方はすでに証明済みと考え、「社会的事実」の発生局面にも妥当すると考えた。

「この原理によって、社会は、諸個人の単なる総和ではなく、諸個人の結合 association によって形成され、それ固有の諸特性を備えた、特殊な現実性を示す体系なのである。個々の意識 conscienses particulières が与えられていなければ、確かに集合的なものは何も生じ得ないが、必要条件は充分条件ではない。なお必要なことは、それら諸意識が結合され組成されること、しかも一定の様式で組成されることであり、この組成からこそ社会生活は結果し、したがってそれこそが社会生活を説明するのである Il faut encore que ces conscienses soient associées, combinées, et combinées d'une certaine manière ; c'est de cette combinaison que résulte la vie sociale et, par suite, c'est cette combinaison qui l'explique。集合しあい、浸透しあい、融合しあうことによって、個人的諸精神は、心理的と形容してもよいが、ただし新しい種類の心理的な個性を成す一存在を生み出すのである En s'agrégeant, en se penetrant, en se fusinonnant, les âmes individuelles donnent naissance à une être, psychique si l'on veut, mais qui contstitue une inividualité psychique d'un

genre nouveau。それゆえ、そこで生じる諸事実の直接的かつ決定的な原因を探求すべきは、その個性の本性のうちにあって、構成単位の本性のうちにはない。集団 *le group* は、その成員たちが孤立させられた場合 *s'ils étaient isolés* にするのはまったく別様に考え、感じ、行動する。だから、そのような場合から出発すると、集団の中で生じていることがまったく理解できない。一言で言えば、心理学と社会学との間には、生物学と物理-化学的諸科学との間にあるのと同じ断絶があるわけである。それゆえ、社会的諸現象が心理的諸現象によって直接に説明されるときはいつでも、その説明は誤っていると確信してよい」[1895:102-103/207-208]。

デュルケム社会学の代表的用語である「集合意識 *conscience collective*」[1895:103/208] はここで登場する。それは創発現象によって誕生した「新しい種類の心理的な個性を成す一存在」=「集団」の呼称である。一般的にはもっぱらこの「集合意識」が関心を集めてきているわけだが、デュルケムの発生論的な立体的社会像の再構成をデュルケム自身の社会思想的課題という観点から目指す本稿にとっては、創発的な「結合」現象こそが最重要の関心対象である。さて、ここで論及されている内容は、本稿（上）で「社会形態学」の提起に触れた箇所での引用文と同趣旨であるが、「結合」の構成要素が「個人」であることが明瞭に記されていることが社会学的認識として重要な前進であることを押さえつつ、ここで記されているのは以下の二点であることを確認しておきたい。

- (1) 「結合」=「組成」とは、「個々の意識」ないし「個人的諸精神」が一定の様式で「組成されること」であり、「集合しあい、浸透しあい、融合しあう」という現象である
 - (2) そのような「結合」=「組成」が、「集団」の意識としての「集合意識」を創発的に産出する
- 先の社会的事実の三つの位相に即して言えば、集

合的な「行為様式」の位相〔①〕〔②〕が「集合意識」に該当し、その発生論上の源泉は第三の位相〔行為様式としての集合的存在様式〕〔③〕の中にある「結合」=「組成」だということである³⁾。この存在論的理解を踏まえ、「結合」から「集合意識」が帰結するというこの発生論的社会像は、上の引用を承けて間もなく第Ⅱ節最終部で次のような認識上の規準に定式化される。

「社会的事実の決定原因 *cause déterminante* が探求されるべきは、それに先行する *antécédent* 社会的事実のうちにあって、個人的意識の諸状態 *les états de la conscience individuelle* のうちにはない」[1895:109/218]。

上の引用部とこの規準を重ね合わせて見ると、デュルケムの発生論的社会像の構想について第3のポイントを確認することができる。実は、「結合」=「組成」が〔行為様式としての集合的存在様式〕に含まれていたことすでに示されていたのであるが、念のため確認しておきたい。

- (3) 「結合」=「組成」それ自体も「社会的事実」である。

こうして、デュルケムの社会像は、「社会的事実」の次元を二つに分け、〔行為様式としての集合的存在様式〕の中にある「結合」が「集合意識」=「行為様式」を創発的に産出し規定するという、立体的な発生論的關係を軸に構想されていたことが明らかになるのである。デュルケムは、創発的発生の動態を軸とする立体的現象として、「社会的事実」を描出しようとしているのである⁴⁾。

(2) 「結合」の社会学的本態

そして、『方法規準』第Ⅴ章第Ⅲ節に至って、この「結合」に対する社会学的把握へようやくとり着く。ここでデュルケム自身が「結合」に対する初の社会学的表現を与えたとともに、「社会的事実」の大幅な再整理をおこなう。以下、叙述を追ってこ

う。

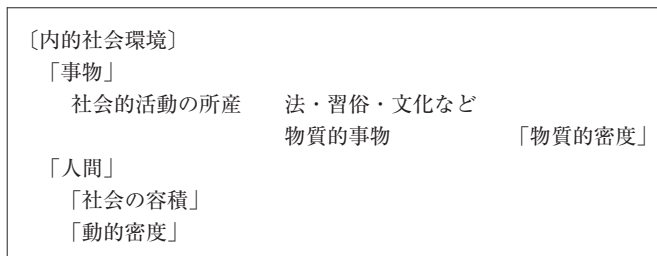
「社会現象を決定する諸条件が、すでに示したように、まさしく結合 associationという事実にあるならば、社会現象はこの結合 association の形態とともに、つまり社会の構成的な諸部分が結びつけられるさまざまな様式に従って当然変化する。……社会の構成 composition に加わってくるあらゆる性質を持った諸要素が合同 réunionによって形成する特定の全体 ensemble déterminéはその内的環境 milieu interneを構成するのであるから、次のように言うことができるであろう。すなわち、なにほどか重要なあらゆる社会過程の最初の起源は、内的社会環境の構成のうちに探求されなければならない L'origine première de tout processus social de quelque importance doit être recherchée dans la constitution du milieu social interne」[1895:111/221-222]。

化学的イメージの色濃い「結合」という言葉をここで「内的社会環境」という社会学的表現に変えるとともに、「内的社会環境」の中に設けた「事物」と「人間」という下位カテゴリーへと、「内的社会環境」を構成する諸要素を振り分け整理していく。

まず、「事物」なるカテゴリーの内容として、文字通り物質的なものと、既成の法、既存の習俗、文学的・芸術的作品等々、過去の社会的活動による所産で現存するものを繰り入れる。これらは、「社会の変容を引き起こすような推進力 impulsion」[1895:112/222]を生み出すものでなく、「いかなる駆動力 puissance motrice も内蔵していない」[1895:112/

222]と、静態的である。このカテゴリーは社会的諸現象の発生論的動因を含まないということである。第I章の内容と対応させてみると、「組織化された信念と慣行」の中で、「組織化された慣行」が、法や習俗や文化的な蓄積など物質超越的な領域に対応すると言えらる。また、「過去の社会的所産としての物質的なもの」とは、「物質的形態としての集合的存在様式」に他ならない。第I章で「社会的事実」を三区分別した際には、社会の物質的基盤は「物質的な集合的存在様式」として「社会形態学上の事実」にのみ繰り込まれていたが、ここでは、「行為様式」全般に対応させて物質的基盤が指摘されており、この点は重要な修正と言えらる。これは、第I章での区分を示した際の発想が「社会的事実」でないものとの峻別に力点を置くもので平面的であったのに対し、ここでは「社会的事実」内部の動的な立体的構造把握が追求されていることによるものであらう。

他方「人間」なる範疇に関しては、「能動的要因として残されるのは、固有の意味での人間的環境のみである」[1895:112/222]と積極的評価を与え、「社会的諸現象の展開過程に影響を及ぼすことのできるこの環境」[1895:112/222]の二種の属性を指摘している。周知のように、「社会の容積 volume de la société」[1895:112/222]と「動的密度 densité dynamique」[1895:112/223]である。ここで、「社会の容積」とは社会的人口規模＝「社会的諸単位の数」[1895:112/222]を指す。正確に言えば、「結合」に参入する「個々の意識」ないし「個人的意識」の数を指している。単純に統計学的な意味での人口規模を指しているのではない。そしてこれをふまえ



て「物質的密度 densité matérielle」[1895:113/224]という第三のカテゴリーが新たに提示される。ここには「社会の容積」と、先に「事物」カテゴリーに含められていた道路や鉄道など「通信・交通路の発達」[1895:113/224]といった文字通り物質的な社会基盤つまり「物質的な集合的存在様式」が移されている。

したがって結局、「内的社会環境」は、「事物」の中で法制度や習俗など物質超越的な領域、「動的密度」、そして「物質的密度」から構成されるものとなっているわけである。ただしこの「物質的密度」は、経済現象に関わるものを例外としつつも、一般的には「動的密度」の程度を客観的に測定するための可感的指標という方法論的意義を与えられているに過ぎない[1895:113/224-225]。

さらに論点を絞りこんで、「動的密度」に関して詳細に見てみよう。この「動的密度」という概念は、上で経済現象を例外視している点に暗示されているように、デュルケムの認識関心や価値的方向性をも示す特徴的な概念であると言うことができる。デュルケムは次のように記している。

「（「動的密度」という言葉は——引用者）諸個人 individus、否むしろ諸個人の集団 groupes d'individusが、精神（道徳）的空隙 vides morauxによって隔てられたままならば効果を持ち得ないような、純然たる物質的凝集 resserment purement matérielではなく、こうした凝集を補助手段、そして一般的には帰結とするにすぎないような精神（道徳）的凝集 resserment moralを指すものと理解されなくてはならない。動的密度は、容積を一定とした場合の、単なる交易上の関係ばかりでなく精神（道徳）的な moral 関係にも実際に参加している諸個人の数、言い換えれば、サービスを交換したり競争したりするばかりでなく、一個の共同生活 une vie communeをともにしている諸個人の数を以って規定される（傍点による強調は引用者）」[1895:112-113/223]。

ここで言われていることは、次の2点である。

(a) 「動的密度」とは、「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」の創発的動態を指示しており、その密度はそれへの成員数により実証的に把握できる。

(b) 「動的密度」とは、サービスの交換や利害追求上の競争という関係（「物質的凝集」）すらもその帰結とみなせるようなものである⁵⁾。

「集合しあい、浸透しあい、融合しあう」と描写される「結合」の動因的・産出的な動態を自然科学的に表現する用語であった「動的密度」が、「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」——「同一の集合的存在 même existence collective」[1895:113/223]はその同義語——という社会的表現に、ようやく置き換えられた。それは、利害関心にもとづく相互交渉に先立ち、それをもひとつの結果としてもたらずような独特の生成力を持つ「集団」の形成を指している。デュルケムの言う「集団」の形成とは、こうした利害以前の、あるいは無利害性を特質とする、独特の精神（道徳）的結束を指している⁶⁾。

ここで関心を惹くのは、「動的密度」が「社会的環節の凝結の程度によってより適切に表現される」[1895:113/223]とされている点である。というのも、諸環節の凝結による生活圏の拡大に伴って、結合する構成要素が小規模な環節から究極的には各個人にまで細分化されていくからであり、このことは「社会的分業」の発展と相即しているからであるが、この点に関しては深く触れず、ここではもう一点、決定的に重要な論点に言及しておかなくてはならない。

(3) 共時的な因果的発生論

それは、この「内的社会環境」＝「集合的進化の規定要因としての社会環境」[1895:115/227]が「相伴的諸条件 conditions concomitantes」[1895:115/227]と呼ばれている点である。ここに、デュルケムの社会学理論の中軸に発生論的な社会像を発掘しようとする本稿にとって、とても重要なポイント

トがある。「相伴的 concomitant」という形容詞が同時性を含意していることがそれである。「集合的進化の規定要因としての社会環境」, 究極的には「一個の共同生活」が、ある歴史的経過上の一時点で作用して次の瞬間には消滅してしまうものではなく、むしろ「一個の共同生活」は「集合意識」の発生的起源であり続け、したがってその存続と変遷を規定し続けるということ、この形容詞は表現しているのである。換言すれば、「集合意識」の創発的な産出は不断に継続しているということである。いくつかの見解に対して縷々批判を試みた後に、自らの主張は「社会現象の原因は社会に内在しているという考え方」[1895:119/232] なのだ。デュルケムが約言するとき、その「原因」は、それが生み出す社会的諸事実——「正常」な社会的事実——と常に共にあり、発生的かつ因果的な規定関係を保持し続けるとみているわけである。こうした共時的あるいは相関的な把握は、次のような論述の中にはっきりと読み取ることができる。

「当該の事実が一般的であることを観察によって立証した後、過去においてこの一般性を生み出した諸条件 conditions に遡り、ついで、これら諸条件が現在においてもなお与えられているかどうか、逆に変化してしまったかどうかを探求するのである。第一の場合には、彼（社会学者を指す——引用者）はその現象を正常なものとして扱う権利があるし、第二の場合には、この特徴を拒否する権利がある。たとえば、ヨーロッパ諸国民の現下の経済的状态は組織化の欠如を特徴としているわけだが、これが正常であるかどうかを知るために、過去においてそれを生み出したものを探求するのである。これら諸条件がなお、我々の社会 nos société が現在も置かれているそれであるなら、そうした状況は、それが引き起こす抗議にもかかわらず、正常的である。しかし反対に、この状況が、別のところで筆者が環節的と呼び、社会の本質的な骨格であった後に次第に消滅しつつある古い社会構造に結び付けられていることが見出

されるなら、この状況は、たとえどれほど普遍的であろうと、現時点では病理的な状態をなしていると結論すべきである。まさに同じ方法によって、宗教的信仰の衰退や国家権力の増大が正常な現象であるか否かを知るといったような、論争を呼んでいるこの種の諸問題は解決されなければならない」[1895:61-62/143-144]。

この論述は、社会的諸現象が正常であるか病理的であるかを判別する方法を提起する中で展開されているものだが、デュルケムが描こうとする共時的で立体的な社会像のあり方を非常によく示している。ある社会的諸現象が正常であるか否かの最終的判断は、それを生み出した「条件」の現在のありよう、すなわち現時点での「内的社会環境」、つまるところ「一個の共同生活」の構造との関連においてなされるべきだというのである。「ヨーロッパ諸国民の現下の経済的状态は組織化の欠如を特徴としている」という認識は、『社会分業論』（以下『分業論』と略記）において「アノミー的分業」を問題化した視点と同じものであるが、この現状がデュルケムの言う意味で「正常」であり得ることが示唆されていることは、『自殺論』における「アノミー的自殺」を“正常の現象”とする視点につながるものとして、注目してよい。

さて、もとより、現時点でのとはいっても過去と絶縁して存在する現在などありえない以上、それは時系列的経過の中で、それ自体が他の社会的要素から影響を受けつつ作用し続けてきたものであることに疑念の余地はない。だからこそ、上の引用文中でも歴史的把握の観点を含んでいるのである。だが肝心なことは、その「諸条件」がさらに今この時点において、判別の対象とされている特定の社会的諸現象と同時に捉え得なければならないとされている点なのである⁷⁾。この共時的因果関係論とも表現すべき社会学的社会像の描出構想は、すでに引用した規準——「社会現象の決定原因が探求されるべきは、それに先行する antécédent 社会的事実の内にてあつ

て、個人的意識の諸状態の内にはない」[1895:109/218]——から、重点を移して読み取ることができる。ここでも“先行する *antécédent*”という形容詞に着目してみよう。それは、「精神（道徳）的凝集」「一個の共同生活」と、それを発生論的な源泉として産出される「集合意識」という次元との、歴史性を背景とする共時的因果連関を表現しているものと理解することができる。本稿（上）「1（3）「社会形態学上の事実」と社会類型の構成」の引用文中にあった“先行する *précéder*”という形容詞は、環節的類型内部での直線的かつ加算的な発展図式に示されるような、素朴な時系列的推移を表現しているに過ぎなかった。それに対してこの“先行する *antécédent*”という形容詞はここで、「精神（道徳）的凝集」「一個の共同生活」が、時間を共有しつつ、発生的にも因果関係においても「集合意識」に先行しているということを表現するために使われている。こうして次の点を確認することができる。

- (4) 「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」と「集合意識」との発生論的な因果連関は、歴史的であると同時に共時的である

こうして、デュルケムの社会学的认识の基本構想には二種の発生論的認識の視座——歴史的発生論の視座と共時的な因果的発生論の視座——が存在すると言いきやう。デュルケムは、これら二つの発生論の視座を総合することによって立体的な社会像を描出しようとしているのである。そしてそれによって、コントとスペンサーに代表させつつ批判してやまなかった流出論的社会理論——「社会」を「個人」から無媒介に導出する——と、流出論的社会理論と完全に同一のロジックを持つ歴史的社會流出論——歴史的な原初形態に後の発展の一切がすでに包蔵され、歴史は単にその偶然的顕在化にすぎない——というふたつの理論的暗礁に乗り上げない社会学を創出しようとしているのである [1895:116/227-228, 119/232]。デュルケムが「発生的 *génétique* と呼び得る方法」[1895:137/258] という言葉を充てているのは歴史的な発生過程を再構成する視角の方

だけであり、ここで共時的な因果的発生論と呼んでいるものはそのうちには入っていないが、これら二つの視角は、併せて用いることで、単に社会現象の正常／異常を検証するだけでなく、社会的現実の存在様態を時間的にも構造的にも立体的に捉え、デュルケム社会学独自の社会像を浮かび上がらせるであろう。

(4) 「集合的存在の諸条件」と因果的説明

以上再構成を試みてきた存在論的な発生的－共時的因果関係に対応する認識方法として、第Ⅵ章「証明の実施に関する諸規準」で採用されたのが、周知の「共変法 *méthode des variations concomitantes*」[1895:129/246] である。デュルケムは、原因と結果の一一対応は「事物の本性」[1895:126/242] の内にある、つまりそれは存在論的な法則であると述べて、次のように記す。

「社会生活は、集合的存在の諸条件における変化に並行する、絶えざる変化の連続である *la vie social est une suite ininterrompue de transformations, parallèles à d'autres transformations dans les conditions de l'existence collective*」[1895:133/252-253]。

「集合的存在の諸条件における変化」＝「一個の共同生活」の変化と「社会生活に生じる変化」＝「集合意識」の変化とを、時間を共有する二つの変数として措定し、それらの並行関係を因果関係として立体的に把握し証明するというのである。もとより、平板に、そして恣意的に、なんらか二つの社会現象を相関させるのではない。ここでデュルケムが例として挙げているのは、「地域、職業、宗教」[1895:133/252] などの「特殊な諸環境」[1895:133/253] と、「犯罪、自殺、出生率、婚姻率、節儉」[1895:133/253] など、一見互いに直接の連関を持たない形で起こるものとして観察される現象群との相関的因果関係である。デュルケムの叙述が不十分である

ために誤解を招きやすい——職業や宗教は「組織化された信念と慣行」〔①〕つまり「行為様式」ではないか——が、デュルケムは「共変法」を使って、究極的には、「組織化された信念」の背後に活動する「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」と「社会生活」の相関的な因果関係を把握しようとしているのである。より踏み込んで言えば、「社会生活」を「内的社会環境」＝「集合的存在の諸条件」の創発的・因果的な表現として把握しようとしているのである⁸⁾。端的に言えば、「一個の共同生活」の歴史的变化と「集合意識」の歴史的变化を、前者を後者の発生論的母胎と見つつ、共時的に相関させて捉えようとするのである⁹⁾。

(5) 社会的事実と社会学の再定義

「結合」に与えた発生的・共時的因果関係論上の意義に関してその社会学的洞察を深め、「内的社会環境」や「精神（道徳）的凝集」という独自の用語を創出し、「共変法」という方法を採用したデュルケムは、この著作を公刊した6年後の1901年、数多く浴びせられた批判に対する反批判の意味をも込めて「第二版への序文」を追加した。そこでデュルケムは、改めて「社会的事実」の定義を提示している。すなわち、「社会的事実」を「制度 institution」〔1901:XXII/43〕と直截に言い換え、「集団によって定められたあらゆる信念および行為の様式 toutes les croyances et tous les modes de conduite institué par la collectivité」と定義し直した¹⁰⁾。「集合体」という発生論上の起源が定義に加えられたことが特筆すべき点であることは言うまでもない。この「社会的事実」の新たな定義に基づいて社会学は、「諸制度、すなわちその生成と機能に関する科学 la science des institutons, de leur genèse et de leur fonctionnement」〔1901:XXII/43〕と定義し直された。「制度」レベルにおける、「一個の共同生活」の維持と再生産に貢献する調和的で相互依存的な機能的関係の把握という課題（機能主義的社会学理論の構築）と相並び、「一個の共同生活」による「制度」

の発生を把握し発生論的な立体的社会像を描出するという課題（発生論的社会学理論の構築）が、デュルケムが抱いていた実証主義社会学建設の構想の中に、それ独自の確固とした地位を獲得するに至った瞬間に他ならない。

3. デュルケム社会学の脱自然科学化を目指して

(1) デュルケム社会学における「社会」

以上、本稿は前後編にわたって、デュルケム社会学における発生論的な立体的社会像の描出構想を『方法基準』から掘り起こそうとしてきた。一見雑多な印象を与える「集合的存在様式」の事実群の中から〔行為様式としての集合的存在様式〕を分画することから出発し、この〔行為様式としての集合的存在様式〕の中に宿る利害超越的な「精神（道徳）的凝集」こそが、「制度」＝「集合意識」に対する共時的な発生論的源泉であることを明らかにしてきたわけである。「精神（道徳）的凝集」は、「制度」との間に発生論的な立体構造を形づくり、歴史的な時間経過の中で相関的に連動するという、共時的・循環的な動態が浮かび上がってきた。社会的事実の発生原因は社会に内在的であると一貫して考えるデュルケムがこの著作で描き出そうとしたのは、社会的意識空間を二つの次元——「精神（道徳）的凝集」と「集合意識」——から成るものと見立て、両者を共時的な発生的・因果的連関の中に連結するという創発的な立体的社会像であった。これが、本稿（上）冒頭において「社会的事実」についての包括的定義を検討して提起した、“(2)「社会的事実」が「固有の存在を享受」しているとはどういうことか”，という課題に対する応答である。「社会的事実」は次元ではなく、その内部に因果相関的な二つの次元——「一個の共同生活」と「集合意識」——を連動させ、創発的な発生論を軸として時間的・空間的な立体構造を備えた自立的な現象空間を形作っているのだ。いわば「社会の発生論的立体構造」という社会像を、デュルケムは描出しようとしたのである。

ところで、こうした動的かつ立体的な社会像において固有に社会学的意義を持つことは、社会現象全体に対する究極の発生的・因果的規定要因とされている「精神（道徳）的凝集」が、没利害的な「一個の共同生活」の本性として措定されていることである。逆に言えば、さまざまな「行為様式」＝「集合意識」全体を「一個の共同生活」の顕現——この観点から使われる用語が「集合表象」である——と見ているのである。「一個の共同生活」が発揮するこの生成力こそ、太陽が惑星を周行させて太陽系を形作っているように、社会的世界を生み出すとともにそれを統合し秩序立て、さまざまな社会的世界の構成要素に各々正しい軌道を巡行させ、“正常”な社会的世界を現出させる、中心なのである。

周知のように、デュルケムは確かに、同時代の歴史社会的状況を睨みつつ、社会統合のあるべき姿つまり“正常”な社会を提示しようとした。しかし、諸「制度」の平板で一次的な機能的連関が安定的に営まれる状況を、十全に社会が統合されている状態とみなしたわけではない。それ自体もまた固定化された行為様式であって、したがって制度の側面をも持つ「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」を人間の集団生活の本質とみなし、これに対して他の諸「制度」を発生論的・因果論的に従属させようとしているのである。その際加えて、「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」が没利害的な、殊に経済的利害を離れたものとして性格付けられているという質的側面を絡めて言えば、この規定関係は、没利害的な「一個の共同生活」が他のすべての諸制度に対して優位を占め、これらを産出し制御するような統合状態を達成した社会的世界を描出するものである。諸「制度」群を一元的で平面的な機能的体系にとどまることから救い出しているのは、諸「制度」の背後にあって一体化しつつ脈打っている、没利害性を最も重要な特質とする「一個の共同生活」の発生論的動態なのである¹¹⁾。詰まるところ、デュルケムが提示しようとした社会統合の理念像とは、「制度」次元での安定的な機能連関が作り出される

とともに、「制度」を生み出す「一個の共同生活」との間に発生論的・因果論的に「正常」な連関が保たれ、発生論的・因果論的・機能的な立体的構造が構築された状況なのである。

ここで、本稿（上）で引用した次の一節を再び引き合いに出してみたい。「現象の正常性は、考察されている種の存在諸条件へと、この諸条件の機械的に必然的な一帰結として、あるいは有機体がそれらの諸条件に適応することを可能とする一手段として、関連付けられるということのみによって説明される」[1895:60/141]という規準である。《考察されている種の存在諸条件へと、この諸条件の機械的に必然的な一帰結として、関連付けられる》という部分に該当するのが、本稿が明らかにしようとしてきた創発的な発生論に該当する。他方《考察されている種の存在諸条件へと、有機体がそれらの諸条件に適応することを可能とする一手段として関連付けられる》という部分に対応するのが、周知のように、「集合意識」＝「制度」の「存在諸条件」に対する機能的な維持機能である。こうして、「一個の共同生活」を中心とするデュルケム社会学の社会像において、「制度」とは、「一個の共同生活」が、その存立を保証するための手段また基盤として生み出し、またそのような意味で自らを表現した——「集合表象」——ものである。他方「制度」レベルの安定的な機能的連関の目指すものは「一個の共同生活」の維持と再生産である。ここには、「一個の共同生活」を中心に描かれた循環構造がある。本稿は、デュルケムによる発生論的な社会像描出の構想を明らかにすることに取り組んできたわけだが、それは「制度」レベルの機能的な連関構造と循環的に統合されることにより、最終的には「一個の共同生活」をめぐる発生論的および機能的な循環構造を描き出すこととなる。「一個の共同生活」を中心として展開するこの全体的な循環構造こそ、デュルケムが「正常」とみなすトータルな社会像と言ってよい。つまりこれが、デュルケムがその社会学において描出しようとした社会像、つまりデュルケム社会学における「社

会」なのである。

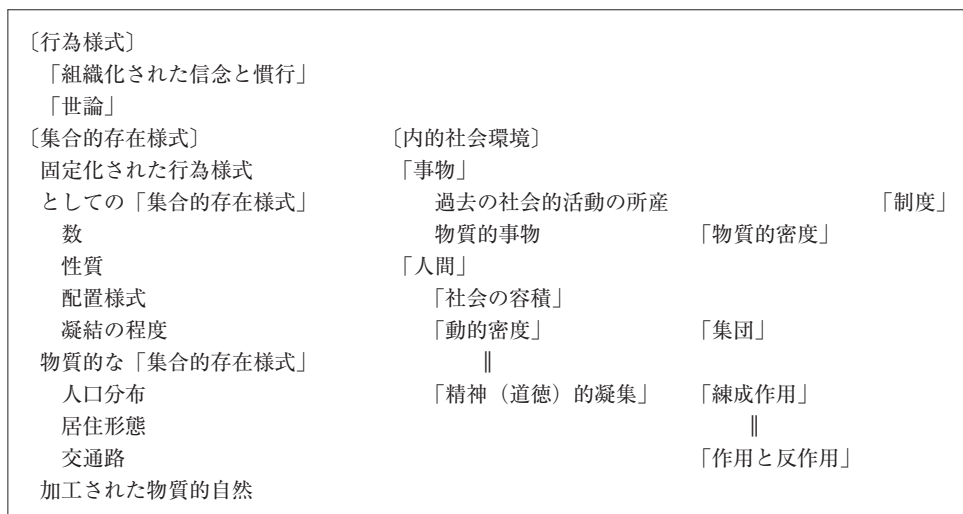
(2) 「精神（道徳）的凝集」の社会学的把握へ向けて

「動的密度」「精神（道徳）的凝集」は、この発生的・機能的循環を起動する唯一の力だという意味で、極めて重要な現象である。本稿がこの概念にひたすらこだわってきた理由はまさにここにある。この現象に関する解明の作業をさらに進めたいと思うのだが、その前にまず、『方法規準』第I章の「社会的事実」の内部区分と、第V章の区分を対比し、さらに他の箇所で見られる重要な用語——「練成作用 *élaboration*」[1895:110/219] や「作用と反作用 *action et réaction*」[1895:11/63] 等——を、ここで整理しておきたい。

「組織化された信念と慣行」が「内的社会環境」を構成する「事物」としての“過去の社会的活動の所産”を経て「制度」へ、〔固定化された行為様式としての「集会的存在様式」〕の中の「凝結の程度」が「動的密度」を経て「練成作用」へ、同じく「数」が「社会の容積」を経て「物質的密度」の構成部分へ、そして物質的な「集会的存在様式」が「事物」の半面をなす“物質的事物”を経て、「社会の容積」とともに「物質的密度」へ繰り入れられている、ということになる。

このカテゴリー構成の改編において注目すべき点は、「行為様式」の主要な内容であった「組織化された信念と慣行」の「信念」と「慣行」が切り離され、「慣行」が「事物」の構成要素へと編入されることによって、前者のカテゴリー構成が実質的に——「世論」はさしあたり「組織化された信念」と質的内容の点で同じ扱いをしてよいものと思われる——無効化されていることである。そしてまた、「組織化された信念と慣行」が安定化することによって〔行為様式としての集会的存在様式〕が機械的に現われるという両者の関係が完全に逆転され、むしろ〔行為様式としての集会的存在様式〕つまりは「精神（道徳）的凝集」が「組織化された信念と慣行」を様々な形で産出し規定するのだという認識へ転換されている。

今や最終的に示されているのは、このカテゴリー構成の改編の結果として、「社会的事実」を構成するものは大別して諸「制度」、「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」、「物質的密度」の三者であるということになったわけであるが、「物質的密度」は基本的には捨象されるので、「社会的事実」の内部構成は、上で述べたように、結局のところ諸「制度」と「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」の二者となったわけである。かくして、没利害的な



「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」の内に見出される、「練成作用」あるいは「作用と反作用」という起動的・産出的な力が、広範な社会的諸現象に対する発生論的・因果論の原点に置かれているということ、逆に言えば、これら社会的諸現象をそのさまざまな発現形態として捉えようとしているのだということが明らかにできたわけである。

以上、「精神（道徳）的凝集」＝「一個の共同生活」に対するデュルケムの認識について我々が現時点で得たのは、関係論的・实在論的・過程論的とも表現すべき三つの観点からの把握である。まず、関係論的観点からの把握は、「集合意識」の恒常的な発生的・因果的基盤をなす現象に位置付けられていることからくる把握である——「集合生活の一般的諸条件 *conditions générales de la vie collective*」「内的社会環境 *milieu social interne*」「相伴的諸条件 *conditions concomitantes*」「集合的存在の諸条件 *conditions de l'existence collective*」等——。本稿が一貫して問題にしてきたのはこの把握をめぐる問題領域であるわけだが、方法論的には「共変法 *méthode des variations concomitantes*」において一方の変数をなすものと位置付けられている。並行して、「集合的存在」あるいは「集合体」という表現でやや实在論的に、あたかもどこかに可感的な現象として実在するものであるかのような把握も示されている。それは、すでに第Ⅰ章で言及されていた基体としての諸「集団 *groupe*」[1895:5/55] のことであって、実はこの言葉とその類義語は『方法規準』（もちろんこれ以外の論著も）の至るところに見出すことができる——「集合体 *la collectivité*」「一個の共同生活 *une vie commune*」「集合的存在 *être collectif*」等——。そして最後に、「結合 *association*」を代表とする一連の表現であるが、これらは発生論的・因果論的動態を指示するために使われている語群であり、本稿の関心からは最も重要な表現群である——「凝結 *coalescence*」「組成 *combinaison*」「合同 *réunion*」「練成作用 *élaboration*」「作用と反作用 *action et réaction*」「動的密度 *densité dynamique*」

「精神（道徳）的凝集 *resserment moral*」等——。こうして、「一個の共同生活」について、これら三つの観点からの把握がデュルケムによって提示されているわけである。

これら三つの観点からの把握は、もとより相互に無関係なものではなく、「精神（道徳）的凝集」を異なった視角から多面的に捉えようとする関心ゆえだと考えられるが、これらをどのように統一的に理解すればよいのかは、この「精神（道徳）的凝集」なる現象の中で何が起きているのかを解明することで明らかにできるであろう。しかしながら、「社会」の歴史的・構造的変動を起動し、そのトータルな統合状態を生み出すことのできる唯一の自然的動因である「精神（道徳）的凝集」は、上に列挙した通り、発生論的関心からは最も重要な過程論的把握であるにもかかわらず、化学的用語の多用がとりわけ激しい。デュルケムは「習俗と法の物理学」を目指した社会学者であったということから言えば、それはむしろ当然のことであろう。しかしそれは別の観点から言えば、物理化学的な方法による社会把握であって、社会学固有の認識を獲得したということにはならないと筆者は考える。見てきたように、あまりにも自然科学的とりわけ化学的アナロジーが多すぎ、生物学や心理学からは独立し得たかもしれないが、なお物理化学からは離脱しておらず、社会学的認識として自立したと言うことはなお到底できない。デュルケム自身が力説していたように、社会学の自立には固有の認識方法と用語が必要である。「凝集」という言葉自体、依然として自然科学的（化学的）発想を色濃く引きずっている。本稿で用いてきた創発や発生という言葉も、実はなお自然科学的用語である。「精神（道徳）的凝集」はデュルケム独自の用語だが、これだけではまだまだ不十分である。さらに、その産出的動態を表現するのに「作用と反作用」や「練成作用」や「密度」などという自然科学用語を援用しているようでは、文化科学・社会科学としての社会学の自立はなおはるか彼方という観を捨て去れない。

いずれにせよ、デュルケム社会学に対する体系的理解の獲得を目指すのであれば、かくして、その発生論的な立体的社会像描出の構想を心柱にしなければならない。そして、固有の意味での社会学が成立するためには、自然科学的な認識方法のアナロジカルな展開の域を脱し、なによりこの現象そのものの社会学化が果たされなくてはならない。「精神（道徳）的凝集」の社会学化、その社会学的把握の獲得とも表現すべきこの課題に筆者は取り組みたいと思うのだが、その際、筆者は上の過程論的把握の社会学化という課題に着手してみたい。述べたように、デュルケムの社会学的認識の構想の中でもっとも重要な位置を占めているにもかかわらず、他面でもっとも社会学的把握から遠いからである。「精神（道徳）的凝集」なる現象は、見たように諸「制度」＝「集合意識」の全域に対する発生的・因果的な起点ないし動因の位置にあるのみならず、それ自体もまた生成し変貌を遂げて行く過程的な性質を持つ事象として捉えるべきものであると、デュルケム自身によってはっきりと語られている。しかし、にもかかわらず、「練成作用」や「作用と反作用」といった自然科学的表現を多用する段階にとどまったまま、なお十分な社会学的説明を待っていると考えるからである。

註

- 1) 「権威」を実証主義的観察にとって利用可能な外的指標とすることは、実証主義的観察にとどまるとしても、実証主義的観察のあり方それ自体に質的な変化を迫るはずのものである。「権威」とは、精神世界において独特のロジックを持つ現象であって、単純な外的観察によって把握し得るものではないからである。なおその際、「権威」をいわば表現する主体が「個人」の場合と「集団」の場合とではおそらく表出のあり方が異なる。このあたりを視野に入れながら、丁寧な検討が必要である。本稿（上）註1）および2）をも参照。
- 2) デュルケムがおこなった社会学的機能分析の定式化の内容は、本稿が試みている発生論的な因果

関係論にも関係しているので、その内容をここで整理しておきたい。デュルケムは、従来の社会学的説明に対して容赦ない批判を加えた上で、機能的分析のいわば社会学化を図る。そこで批判されているのは、デュルケムの眼から見て転倒した心理学的機能分析である。デュルケムはそこで機能的分析一般に対して否定的とも受け取れる見解を述べているが、社会的事実の機能的側面それ自体を全面的に否定しようとしているのではない。個人的な要求や欲求など個人心理的内容なるものは、「社会的事実」がいったん発生して固定化した後に、その「社会的事実」によって結果的に満足せしめられるのであってその逆ではない、とデュルケムは考えている。そこから、個人心理的内容を社会現象の発生原因とみなす考え方を、事柄を逆転させたものとして拒否しているのである。ここでのデュルケムによる批判の論点は次の4点に要約することができる。

- ①機能的説明一般に対する発生的な因果的説明の独自性を認め得ず、前者を後者にすり変えている。
- ②その際、機能的関係が逆転せしめられ、社会的事実は欲求充足のための手段とされているが、むしろ社会的事実の欲求充足機能は、社会的事実それ自体の成立を前提して初めて捉えられるものである。
- ③「欲求」ないし「必要」は、個人的ないし個別的な欲求と同一視され、社会体全体の「欲求」ないし「必要」は完全に無視されている。
- ④以上の転倒に起因して、個別的な心理的内容から社会的事実が無媒介に導出されてくる。

デュルケムがコントとスペンサーの学説——前者は「人間性一般」[1895:97/200]から、後者は「個人の身体的・精神的構造」[1895:99/202]から社会を無媒介に導出する——に代表させている流出論的社会理論への批判は、以上の点を内容としている。これに対してデュルケムが打ち立てようとした機能的分析の考え方は、社会的事実の発生という問題領域を、流出論的理論を否定した上でいったんエポケーし、社会的事実の存在を一応の所与とした上で、それが「社会有機体の一般的欲求 besoins généraux de l'organisme social」

[1895:95/196] に対して有する積極的貢献を解明しようとするものであり、それが個人々の心理的内容に対してもつ意義に関してはせいぜい二義的な関心を払うにすぎないものである。この考え方は、「社会的事実の機能は、常に、それが何らかの社会的諸目的 fins social との間に維持する関係のうちに探求されなければならない」[1895:109/218] という規準として明確に定式化されている。上の批判の内容に見られるように、デュルケムは転倒した心理学的流出論を逆転させ正立させることによって個人心理学的な目的論的機能論を完全に否定し、機能的分析を有効な社会学的機能分析として確立しようとしているのである。つまり、デュルケムが否定しているのは、個人心理的要素から無媒介に社会的事実を導出し、両者の間に何らの質的差異をも認めようとしないう流出論的発生論なのであって、社会的事実の成立過程の解明を中心課題とする社会学的発生論一般ではないのである。したがって非流出論的発生論までもが拒否されているわけではない。要するにデュルケムの論点は、(1)「社会的事実」の機能分析と発生分析を区別すること、(2)個人心理学的機能分析を拒否して社会学的機能分析を確立すること、(3)流出論的発生論を否定して社会学的発生論を樹立すること、この3点である。本稿が行おうとしているのは、まさしくこの(3)の理論的構想を『方法規準』に即して再構成することである。

- 3) 「社会は行為を流し込む鑄型のようなものとして存在している」というデュルケム自身の言葉から思い描かれるような、高圧的さらには運命的な「社会」イメージを相対化するために、アルパート以来、デュルケム社会学の中にもいわゆる「創発的発生論」が存在していることを何人も研究者が指摘してきた。この部分はそうした主張の有力な根拠のひとつであり、「社会的事実」に関わる発生論を構成する理論的心臓部である。しかし、自然科学的（化学的）表現が使われ続けていることで分かる通り、なお固有に社会学的な理解に到達しているわけではない。

なお、このような文言は、『方法規準』のみならず他の論著においても、数多くしかも容易に見出すことができる。『方法規準』では次のような箇

所が端的で分かりやすい。

「集合的感情は共同生活の帰結であり、個人的諸意識の間で取り交わされる作用と反作用 action et réaction の所産である」[1895:11/63]。

「筆者は、社会生活は自然的なものと言ったが、個人の本性の裡にその源泉を見出しているということではない。それ自体一種独特の性質のものである集合的存在からそれは直接的に由来するということであり、特殊の諸意識が結合という事実によってそれに従属し、かつそこから新たな存在形態が生じてくるところの、あの特別な錬成作用から帰結するということである nous disons que la vie sociale est naturelle, ce n'est pas que nous en trouvons la source dans la nature de l'individu ; c'est qu'elle derive directement de l'être collectif qui est, par lui-même, une nature sui generis ; c'est qu'elle résulte de cette élaboration spéciale à laquelle sont soumises les consciences particulières par le fait de leur association et d'où se dégage une nouvelle forme d'existence」[1895:122/237]。

この引用箇所注目すべき点は、「社会」の直接的起源として「集合的存在」という次元を明示し、「社会」とは別位相の事象としていることである。加えて、比喩的表現に特有の曖昧さは否定できないものの、「集合的存在」における「錬成作用」という表現でその動態を表現している。「動的密度」と同じく、「錬成作用」という表現も、「集合的存在」の産出的な動態を実証主義社会学の観察的観点から把握しようとする化学的アナロジーに他ならない。こうした発生論的な認識はデュルケムの研究活動の中で一貫して、晩年まで変わらない。問題は、この認識を社会学的認識としてどこまで確かなものとし、社会学的認識を豊饒化することどこまで成功しているかである。そして、「社会の起源を個人の本性 nature de l'individu の内に見出す」[1895:122/237] ことを一貫して拒否するデュルケムが、この「社会生活」発生論の社会学化にどこまで成功しているの

かが、彼の社会学的構想の成否全体を決定付けるものとなろう。筆者が欲しているのは、デュルケム社会学に固有の社会学的実質を持つ発生論を可能な限り再構成し、その意義を明らかにすることである。

ところで、学説史的には、デュルケムの「結合」論の自然科学分野からの直接の輸入元は、自然的現象界の階層的構成と非決定性を弁証しようとしたエミール・ブートルーであったとみてよい。しかしまた、ルソーの「譲渡論」とモンテスキューの「事物の本性」論もまた、デュルケム発生論のベースを成している。デュルケムは創発／譲渡現象を「事物の本性」のひとつとみなし、自らの社会学理論の基軸としたのである。

- 4) デュルケムは「集合意識」を超歴史的で静態的な自足的現象と見なしてはいない。「集合意識」を実体化するのは浅薄な錯誤に過ぎない。デュルケムは、「集合意識」の発生論的起源たる「結合」をこのように「社会的事実」の中に特定することによって、「集合意識」を「社会的事実」の領域内で内動的に動態化する契機を明らかにしているのである。この構造的な発生論はやがて『宗教生活の原初形態』で展開される集合的沸騰論で具体化されていく。
- 5) このような理解は、実はすでに別のところで示されている。本稿（上）1（2）で、社会現象について正常と異常を判別する第Ⅱ規準として引用した個所の「存在諸条件」にこの「精神（道徳）的凝集」を代入すれば、まったく同内容の文章となる。
- 6) この認識は、わずか2年前に発表された『社会分業論』における「動的密度」と「物質的密度」との関連をめぐる考察から劇的な転換を示すものとなっている。『社会分業論』においては、「物質的密度」を「動的密度」の土台とする方向で、不可分離的に両者を把握する傾向が顕著であった。これに対し『方法規準』では、そうした唯物論的傾向を持つ認識が逆転され、見たように、「動的密度」の顕現形態としての「物質的密度」という認識が提示されている。いずれにせよ、これら「動的密度」と「物質的密度」とは、『分業論』において“社会的世界における重力の法則”とみな

され、それ自体に対する社会学的分析作業は行われていなかった。それに対し『方法規準』では、「動的密度」が最終的には「集合生活」内部での産出的動態に他ならないというところにまで一挙に把握が深化しており、この「集合生活」の内部的状態がその産出的動態を通じて外部的に顕現したものが諸「制度」なのだとする発生論的な社会認識に到達している。「集合表象」とは、まさに「集合」＝「集団」の内部的な動的状態を代表する産出物であるからこそ、そう呼ばれる現象なのである。これは、唯物論から観念論への転向といったものではなく、デュルケム自身による実証主義的認識の深化に伴うものとみるべきだろう。デュルケムの発生論的社会像の描出構想における究極的主題は、この「集合」＝「集団」の能産的力動をあくまでも社会学的に解明することにある。

- 7) ここまで理解してきて初めて、デュルケムが『社会分業論』に言及している [1895:114/225] 理由を納得することができる。とはいえ『分業論』を参照するには及ばない。デュルケム自身による、著者本人ならではの卓抜な要約がこの著作の脚注にある [1895:62/144-146]。デュルケムはそこで、集合的なものを対象とする諸感情の一例としての宗教的信仰が、「環節的類型」から現在の社会構造への移行と共に衰退したのは、その衰退現象が「我々の社会的環境の構造」＝「我々の社会の構造」＝「我々の集合生活の最も一般的な諸条件」 [1895:62/145] に由来する、まったく“正常な”現象であることを確認している。

なお、ここには実証主義社会学全体の価値論的性格および社会的存在性格に関わる極めて重大な論点が顔を覗かせている。デュルケムは、「現象の一般性を説明し正当化している諸条件（「社会的環境の構造」を指す——引用者）は、直接に観察されたものではなく、帰納的に導かれたものである」 [1895:/146-147] と明言しているが、これは、数の多少とは関係のない「科学的な価値と興味」はどこにあるのかという問題に関わっている。デュルケムは、ある社会的現象が正常であるか病理的であるかを判別する根拠として、神秘主義と観念論的方法——いずれも現象に対する評価が研究者の主観的観念に依存する——を批判しつつ、

「一切の主観的所与から独立に、それ自体において考察された諸現象の内に、それらの実践的価値に従って現象を分類することを可能とするような要素」[1895:/123]を見出すべきだと主張し、先に見たようにこれを、「それ自身で、数の多少とは関係なく科学的な価値と興味を持つ……事実」という表現で承けている。

しかし、たとえ「実践的価値」が社会的世界に内在的なものであっても、「帰納的に導かれた」「科学的な価値と興味」は、その社会的世界に対して認識上の距離を設ける実証主義社会学の側にしかあり得ないだろう。実際、「社会的環境の構造」が、「科学的な価値と利益」を抱いて対象に臨む実証主義社会学者の「帰納的」操作によってのみ特定され得るものであるならば、結局、社会的諸現象に対する正常ないし病理の判定と社会類型の構成は、実証主義社会学の抱く「価値と利益」によって恣意的になされることになるだろう。デュルケムは「実践的価値」と「科学的な価値と利益」が一致することを素朴に信じているか、あるいはそう願うこと篤かったのだと思われるが、その保証は実はどこにもない。ドレフュス事件を例にとれば、この事件に見られるように、実証主義社会学にとってはさしあたり対象的存在でしかない社会的世界において「実践的価値」は複数存在し、しかも相互に対立し排斥し合っている。デュルケムが自らの「道徳的個人主義」なる思想を携えてこの緊張に満ちた拮抗状態の中に飛び込んだとき、デュルケムは特定の「実践的価値」を選び取ってこれに与したのである。また、特に「正常」と「病理」の判定に関して言えば、実証主義社会学が上のようにして得られた知見を無自覚・無反省に社会的世界に適用するとき、実証主義社会学は、その知見の真理性を判定する一つの方法として、その知見の妥当性を社会的行為者に準拠させるという方法論的回路を包含しない以上、社会的世界における行為当事者にとって頭越しに「真理」を語ってしまうという、場合によっては極めて抑圧的で暴力的な事態を招来してしまいかねない。端的に言えば、実証主義社会学においては「実践的価値」と「科学的な価値と利益」との符合が素朴に自明視されているために、その社会

的身体性の問題が盲点となっていると言わざるを得ないわけである。

- 8) まさにこの共時的因果連関の統計的証明を実演したのが、『自殺論』である。「地域、職業、宗教」といった言葉を見ると、先の整理の中での「事物」と化した制度的空間が指示されているような印象を受けるが、彼の眼は、そうした制度的空間の背後に、その制度的空間を存立させている「組織化された信念」を見ている。そして、さらにその背後にあってそれに社会的現実性を付与している「精神（道徳）的凝集」「一個の共同生活」を透視し把握しようとしているのである。『自殺論』の中で最も理論的に重要な言葉は「世論 opinion」であるが、この「世論」こそ「組織化された信念」を指すのであり、それが「自殺」という現象を引き起こす強さを統計的に捉えることを通じて、「組織化された信念」の背後にある「一個の共同生活」（正確には複数の「一個の共同生活」）との相関的な因果関係を把握しようとしているのである。
- 9) この点は、「社会的環境の構造」したがって究極的にはデュルケム言うところの「集合存在」を固定化し、さらには超歴史的現象として実体化しないために、大いに強調しておかねばならない。実際、デュルケム社会学において「集合的存在」は、それ自体歴史-社会構造的に変遷を遂げていくものと考えられている。そして、「集合的存在」は近代社会への移行とともにその本来的な「純粋さ」を喪失していくものと見なされている。本節冒頭の引用部を見て明らかなおと、 「集合的存在」もまた歴史的・構造的変化を遂げていくのである。
- 10) デュルケムが主唱したとされるいわゆる「社会学主義」は、こうした観点に基づくものである。社会的世界を形成する多種多様な「制度」は、それが究極的に「一個の共同生活」=「集合体」=「集団」に発するものであると信じられる限りにおいて、すべて「集合意識」と呼び得ると見なし、したがってすべて社会学の研究対象となり得ると考えられたわけである。
- 11) 以上、デュルケムが「社会形態学的事実」を「精神（道徳）的凝集」に絞り込んでいく過程を追

跡しながら、その「精神（道徳）の凝集」による社会生活の共時的な発生論的規定という認識の構図を再構成してきた。いまだ自然科学的実証主義の思考圏に彼の思考はあり、その深い影響を受けているけれども、デュルケムの発生論的な社会像の構築構想がこうして一定程度再構成できたわけである。ところで、デュルケムはこのような社会像の基礎的なイメージを、筆者の見るところ、モンテスキューの社会思想から得ている。学説史的・思想史的な系譜関係を、しかもかなり強い系譜関係を、デュルケムとモンテスキューとの間に見ることができる。というのも、デュルケム社会学を支えている思想的基盤こそ「事物の本性」という観念だからであるが、この観念はデュルケムがモンテスキューから批判的に継承したものである。「社会科学の成立に対するモンテスキューの貢献」（1895）と題された論文がデュルケムの学位論文『社会分業論』の副論文として提出されていることで分かるように、デュルケムの社会学的思考にとってモンテスキューの社会思想が与えた影響は決定的であったとみてよい。『社会分業論』は「社会科学の成立に対するモンテスキューの貢献」を下敷きにせずして理解することはできないし、この『方法規準』もまたそうである。そして実際、デュルケムの社会学的思惟は終生この「事物の本性」という観念に支え続けられていると言っても過言ではない。そして、デュルケムの社会学建設の努力は、「事物」に“一個の共同生活”を代入して、あるいは“一個の共同生活”に限定して、“共同生活の本性”を明らかにする科学を創設しようという、壮大な試みであったと言ってよい。“事物”を“一個の共同生活”に置き換えたこと、まさにこの点こそ、デュルケムがその社会学を構想するに際してモンテスキューの思想に決定的に負うところなのであり、しかしまたモンテスキューとデュルケムを分かるところなのでもある。すなわちデュルケムは、「社会の本性」に基づいて社会的諸現象が生起し消滅していくものであることをモンテスキューが正しく洞察しながら、しかし他方で自然的風土をも重視したために、「共同生活の本性」の何たるかを十分に明らかにすることができず、「法」を典型とする人間

的諸現象が人間的加工を受ける以前の自然風土によって左右されるかのような風土論的かつ決定論的な社会認識をももたらしてしまったと考えているのである。つまり、「事物」を「風土」とほとんど同一視する議論を組み上げてしまったと見ていのである。「社会形態学上の事実」をめぐる混乱は、モンテスキューのそうした混乱をかなりの程度そのまま引き継いでしまったことによる。デュルケムの社会学建設の営みは、その全体が、「一個の共同生活」の本性とはいかなるものであり、それを経験科学的に認識するとはどういうことなのかを明らかにしていく歩みとなっている。《「社会」とは没利害的な共同生活であり、そのような意味での「社会」の「本性」とは、「社会」を存続させる機能的な社会的制度空間を創造する産出活動である》、これがデュルケムの社会学的認識である。ちなみに、こうした観点から見ると、「アノミー」とはそのような本性を持つ「共同生活」が崩壊した状況を指していると考えることができる。“事物”それ自体が消失するのである（!!）。これが「事物の本性」論に依って立つデュルケムにとって途方もなく深刻な危機であることは言うまでもない。ルソーが「自然に還れ」と叫んだのだとすれば、デュルケムは「共同生活へ還れ」と呼びかけたのだと言えるだろう。しかし、その「共同生活」が崩れ去るのである。「本性」を発揮するはずの「事物」＝「共同生活」が崩壊する。これが、「アノミー」が危機である所以である。

引用・参考文献

引用箇所は、[原著出版年：原著頁／訳書出版年：訳書頁]で示す。

1886, *Les études de science sociale*, [La science et l'action, pp.184-214]

◆1988, 「社会科学の諸研究」『社会科学と行動』第5章, 144-167頁。

1888, *Cours de science sociale. Leçon d'ouverture*, [La science et l'action, pp.77-110]

◆1988, 「社会科学講義……開講の辞」『社会科学と行動』第1章, 62-89頁

◆1975, 「社会学講義……開講の言葉」『モンテス

- キューとルソー』, 155-194頁.
- 1892, Contribution de Montesquieu à la constitution de la science sociale, [Montesquieu et Rousseau, pp.25-113]
- 1975, 「モンテスキューの社会科学成立に対する貢献」『モンテスキューとルソー』, 3-75頁.
- 1893, *De la division du travail social: Etude sur l'organisation des sociétés supérieures*, 2e éd. 《Quadrige》, 1991, PUF.
- ◆1971, 田原音和訳『社会分業論』, 青木書店.
- 1895, *Les Règles de la méthode sociologique*, 19e éd, 1977, PUF.
- ◆1978, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店
- 1897, *Le suicide: Étude de sociologie*, Nouvelle éd 1979, PUF.
- ◆1985, 宮島喬訳『自殺論』, 中央公論社.
- 1899, Morphologie sociale, [Journal, pp.181-182]
- 1899, Remarque sur la nature de la religiosité, [Textes, pp.9-10]
- 1900, La sociologie en France au XIXe siècle, [La Science sociale et l'action, pp.111-136]
- ◆1975, 「十九世紀におけるフランスの社会学」『モンテスキューとルソー』, 195-222頁.
- ◆1988, 「十九世紀におけるフランスの社会学」『社会科学と行動』第2章, 90-109頁.
- 1900, La sociologie et son domaine scientifique, [Textes1, pp.13-36]
- ◆1975, 「社会学とその学問的領域」『モンテスキューとルソー』, 223-252頁.
- 1918, Le Contrat social de Rousseau; histoire du livre, [Montesquieu et Rousseau, pp.25-113]
- ◆1975, 「ルソーの社会契約論」『モンテスキューとルソー』, 77-152頁.
- 1961, Emile Durkheim and his sociology, Alpert Harry: Newyork: Russell & Russell
- ◆1977, 『デュルケムと社会学』H・アルパート, 花田綾・仲康・由木義文共訳. 慶応通信.

What Kind of Image of Society did Durkheim's Sociology Try to Portray? : Rereading of "Rules of Sociological Method" (2)

KAGEI Mitsuru ⁱ

Abstract : Durkheim's project to establish positivistic sociology was not made from purely academic desire or necessity, but was his response, as a social thinker, to the unstable social and historical situation of France in late 19th century. So Durkheim's sociological theory is a work which was born from his thought as a social thinker. In this paper I intend to reread the "Rules of sociological method" from this perspective. And then, I will reveal that the category of "*fait social*" posited, in parallel with his presentation of method of recognition in positivistic-sociology, as a object of positivistic-sociological recognition, was neither a faithful replication nor selective construct but Durkheim's unique image of society sketched as a fact which "should" exist. Further, I will make clear that the characteristic of this unique image of society consists in the fact that it portrayed, in the center of the image of society, the generation theory of production by "group" or "collective life", and therefore has a three dimensional structure. Finally, I will point out that we need to discard chemical analogies used for "*fait social*", obtain the recognition and representation appropriate for sociology, and refine this image of society, to fertilize Durkheim's sociology as social thought.

Keywords : manner of collective existence, general condition of collective life, association, internal social environment, Montesquieu, moral density, covariant method, collective consciousness

ⁱ Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University